筑波大学

次世代グローバルリーダーの育成プログラム

七月二五日と二六日、日本学術振興会主催の「ひらめき☆ときめきサイエンス」の採択プログラム「次世代グローバルリーダーの育成プログラム～将来の国際的キャリアを目指して～」が、茗荷谷の筑波大学文京校舎で行われた。このプログラムは高校生対象で、グローバルな現代の世界でキャリアとして輝く人材となるために必要な知識や能力・アドバイスを、レクチャー、体験型アクションラーニング、国際機関・企業訪問を通して得るというものだ。今回はお茶高から三年生の加藤杏さん、平田桃さんと、二年生二名が参加した。

「次世代グローバルリーダーの育成プログラム」に参加して

二年　西脇　志保

七月二六日金曜日、私は「ひらめき☆ときめきサイエンス採択プログラム」の「次世代グローバルリーダーの育成プログラム」に参加させていただきました。元々このプログラムは学校の紹介を通して知りました。いつもはお茶高という少ない人数の中で過ごしてきたので、この機会に他校の人と話したり、多くの職種の人から様々なお話を聞いたりしてみたい、と思ったので、今回このプログラムに応募しました。

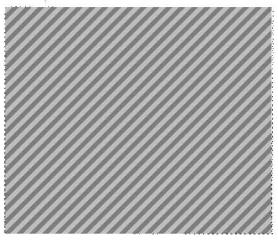
当日はグループごとのディスカッションや、グローバル企業訪問といった内容が行われました。グループごとのディスカッションでは、国際間での交渉術を、体験型アクションラーニングを通して学びました。自分の主張を通そうとするうちに、最初に計画していた交渉術から外れ、相手の賛同を得られないというハプニングもあったのですが、実際の交渉現場のような緊張感を感じられたことは、とてもよい経験になり、この授業は私にとってかなり充実したものとなりました。

グローバル企業訪問では、世界銀行東京事務所とGoogle東京事務所を訪れました。前者の方は銀行と言っても、私たちの身近にある銀行とは異なり、途上国への資金援助などを主な目的としているそうで、担当者の方からのお話の中には新しい発見がたくさんありました。

後者の訪問は前者とは全く違う驚きがありました。まず会社の入り口が銭湯デザインという、会社の入り口から人を驚かすような斬新なアイデアの詰まったデザインで、ただただ息をのむばかりでした。（言葉にできないくらい面白いものでした。興味がある方は調べてみてください。）

Googleオフィサーの人によると、日々新たなアイデアを出し合い、革新していくためには頭のリフレッシュが必要なため、このように遊び心あふれるデザインになっているそうです。どちらの会社も英語力が必須で、英語を話せることは基本教養であるのだな、と改めて感じました。

今回の企画を通して、能動的な経験と受動的な経験の二つを同時に行うことができました。このようなことはいつでもできるわけではありません。最初私もこの企画に参加するまで心配事ばかりでした。けれど実際に始まってみるととても楽しかったです。何事もやってみなければ積み上げていけないな、と感じました。このような企画に参加できて本当に良かったです。



西脇志保さん
手に持っているのは当日の資料

グローバルリーダーに求められる行動とは

二年　大庭　檀

このプログラムに参加した理由は、将来大好きな建築の分野で世界の国々に貢献したいという目標を持っているからです。企画のどれもが私にとって新鮮で貴重なものでしたが、特に印象に残ったこと二つについて書きたいと思います。

一つ目は、模擬国際遠隔会議をしたことです。資源開発に関する国際交渉を体験学習しました。シナリオは以下の通りです。レッド国にメタンハイドレートが発見されましたが、採掘するための費用も技術もないため、技術力の提供をブルー国、開発費用の提供をホワイト国に依頼しました。メタンハイドレートの開発によって生じる利益を三ヵ国でどう分けるか話し合い、最終的にお互いが納得する利益配分を決定するというものです。私は、ブルー国のグループに入って交渉を行いました。ポリコムというインターネット回線を使い、二国とは別々の部屋で話し合いました。

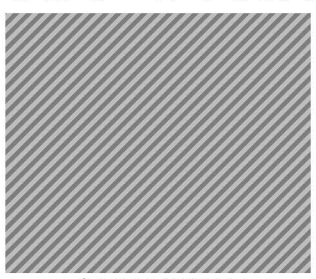
まず、ブルー国のメンバーで、何パーセントの利益を要求するか、どのように交渉を進めるかについて話し合いました。様々な意見が出て主張が何度も変わるたびに、状況を把握、整理して意見を出す頭の回転の速さが求められました。また、恐れず自分の意見を言わなければいけないことも実感しました。

実際に話し合い、相手国に合理的な説明をすることが重要だということが分かりました。それぞれの国が利益を確保したいと考えている中で、自分の国が理想の利益を獲得するには、利益を確保するのが当然だと言い切れる理由をきちんと相手に分かりやすく伝えなければいけません。私たちブルー国は、合理的な説明を最後まで貫いた結果、納得のいく利益を確保することができました。

二つ目は、グーグルの東京本社を訪問したことです。グーグルのオフィスは、他の日本の会社とは全く違う雰囲気が漂うユニークなデザインで、驚きの連続でした。壁紙がとてもカラフルな上、ビリヤードや卓球台が置いてあり遊び心満載で、この環境が独創的なアイデアを生むのだと確信しました。グーグルの方々は、仕事だけのことを考えるのではなく、自分の身の回りのことに常に好奇心を持っているようにみえました。

また、グーグルでは社員同士が役職の上下関係なく名前で呼び合うそうです。オフィス内でも、社員同士が楽しそうに話している姿がよくみられました。グローバルな現場で異なった価値観を持つ人と働くときは、コミュニケーション能力が求められると思います。

このプログラムに参加して、ディスカッションをしたり、グローバルな現場の生の声を聞いたりと受け身ではなく主体的な深い学びができたと思います。グローバルリーダーに求められる素質はたくさんあると思いますが、その中でも特に、相手のことを理解しようとする姿勢、自分の意見をはっきりと口に出すこと、社交的であることが挙げられると感じました。将来の目標に近づくために、このプログラムで見つけた課題に取り組み、今回学んだ、グローバルリーダーに求められる行動をまずは部活や文化祭などで実践したいです。



プログラムの代表者、
筑波大学教授永井裕久先生と大庭檀さん

当日のスケジュール

10：00	開講式（オリエンテーション・科研費の説明）
10：20	レクチャー「次世代のグローバルリーダーに求められる能力」
11：00	アクションラーニング演習
	①「データマイニングを活用したグローバルリーダーシップのコンピテンシー測定シュミレーション」
	②「遠隔通信システムを利用した模擬国際会議」（異文化コミュニケーション体験）
11：40	外国人教員とのランチミーティング
13：10	世界銀行グローバルオフィサーのプレゼンテーションと質疑応答（世界銀行東京事務所にて）
14：50	グーグル株式会社グローバルマネージャーのプレゼンテーションと質疑応答（Google東京オフィスにて）
16：30	フィードバックセッション（ふり返りのグループ討議）
17：00	修了式（アンケート記入、ジュニアグローバルリーダー・パスポート授与）

論説　「メンテナンス元年」を実効性のあるものに

今、全国各地で、道路や橋などのインフラの老朽化が相次いでいる。道路においては、経過年数三〇年以上の区間は首都高速・阪神高速で約五割、高速自動車国道では約四割を占め、橋の場合、地方公共団体が管理する橋梁における通行止め・通行規制橋梁数は約一四〇〇橋にのぼる（平成二四年四月現在）。高度経済成長期以降、建設ラッシュに沸いた日本のインフラは、確実に古くなりその機能を失いつつある。

インフラの老朽化が招いた惨事として、昨年一二月に笹子トンネルで天井板が崩落し、九名の尊い命が犠牲になったことは記憶に新しい。事故調査・検討委員会報告書は、一二年間適切な検査がなされなかった事故前の維持管理体制を不十分と結論づけた。笹子トンネルは、設計の段階から維持管理しづらい構造で、予算の制約から適切な時期に点検がなされなかった。さらに、補修履歴や工事関係書類の保存・管理もずさんな維持管理の実態を浮き彫りにした。また、新規建設に比べ利幅が少ないため、補修・点検分野の担い手が不足し、高度な補修技術を持つ人材が育たないという構造的な問題も深刻だ。

このような現状を踏まえ、安倍政権は二〇一三年を「メンテナンス元年」と位置づけ、民間活力を利用したインフラ整備を掲げている。確かに財政難の中でインフラ整備を進めるために民間活力を導入するという発想自体は意義あるものだが、日本全国のインフラの維持管理を民間活力で担うのは、到底無理がある。そもそも社会の基盤であるインフラを整備し、国民生活の安全を確保することは、国や地方自治体のもっとも重要な役割の一つである。

東日本大震災においては、一本の道路の存否が避難や援助物資の輸送の可否を直接的に決定し、地元の人々から「命の道」と呼ばれたという。だが、震災から二年半後の先の参議院選挙では、アベノミクスによる円高是正や株価上昇などの経済政策ばかりがとりざたされ、インフラ整備の重要性や緊急性については、ほとんど話題としてとりあげられなかった。

二〇年後には、全国の橋梁における築五〇年以上の割合は六五%、トンネルは四七%にそれぞれ急増することが見込まれており、メンテナンスは喫緊の課題である。政府は今年公共事業費に七兆七〇〇〇億円を投じるが、中身は選挙での票に結びつきやすい新規事業が中心である。

安倍首相は「憲法改正」や「国防軍の創設」などを声高に主張しているが、さらなる事故や震災が起きる前に、まずは私達の命や生活の安全に直結するインフラの老朽化を食い止め、足元の生活の安全を確保することが急務なのではなかろうか。

（畑江つかさ）

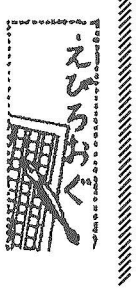
茶実子

こんにちは、新聞部の部長の茶実子です。在校生の方は久しぶり、来校者の方は、初めましてね。さて、夏休みはどうだったかしら？有意義に過ごせて満足している人も、そうならなかった人もいるんじゃない？

私は「日本近代文学館　第五〇回夏の文学教室」に七月二五日と二六日に行って来たわ。著名な方々によるそれぞれの一つのテーマにつき約一時間の講演を、高校生は無料で聴くことが出来たの。文学ファンにとっては至福の一時だったわ。スペースの関係上ほんの少しだけど、特に印象に残った部分を紹介するわね。

まず、伊藤比呂美先生による森鴎外についての講演では、鴎外の描く女性像や方言に対する森鴎外と夏目漱石の比較や、文尾の形の統一などのお話で私の中の鴎外のイメージが大きく変わったわ。それに、川上未映子先生と蜂飼耳先生による「詩の、みえかくれするところ～たとえば中也、賢治、朔太郎～」では、詩の新しい解釈やお二人が同じ詩人として感じることを聞けて、とても新鮮だったわ。

これから忙しい時期になるけれども、そんな時期だからこそ、時間を見つけてじっくりと文学など自分の好きなことにつかる心の余裕が必要よ。忙しくても、「心が忙しくなって」はいけないわ。お互い、心の余裕をもった素敵な人になれるように頑張りましょう。



茶実子：今年度二回目の発行となる文化祭号、いかがだったでしょうか？今回は来校者の方、特に受験生向けのいわば「お茶高紹介号」でした。部員の方々、本当にお疲れ様でした。感想をどうぞ。

茶琴：部員三人のうち、二人が新入部員という無茶さ…。部員が増えるといいなぁ。

紅緑：それに私たちみんな二年生よ。来年どうしようかしら？

茶実子：そうですね。現在、二年生三人で新聞を作っています。在校生でも、来年度以降の新入生でも、是非入部して下さい！貴女と一緒に新聞を作ることの出来る日を部員一同、心よりお待ちしております!!

この新聞で、来校者の方々、とりわけお茶高を受けようかと考えている受験生の方々が、よりお茶高を知り、モチベーションを上げることの手助けとなったら幸いです。

以上、最後まで読んで頂き有難う御座いました。